

『新自由主義は悪魔のシステム、社会的価値を壊すもの』と自己批判 『資本主義はなぜ自壊したか』 かつての構造改革推進者の著書 大きな話題に

山崎温之

わが党の「構造改革路線」批判と通じるものが

いま、かつての小淵内閣の諮問機関であった「経済戦略会議」の議長代理だった中谷巖氏(元一ツ橋大学教授)が書いた『資本主義はなぜ自壊したか』(集英社インタナショナル)が大反響を呼んでいます。この手の本にしては珍しくすでに6万部が売れているといわれます。1月に『週刊朝日』がとりあげ、NHKのニュースでも

取り上げられ、2月11日の読売新聞も紙面で大きく紹介しています。

本の中で言っていることは、これまで日本共産党などが新自由主義、構造改革路線を批判してきた内容と重なりますが、そのことをかつて構造改革を推進していた中心人物が言い始めたのですから説得力があります。

新自由主義では、「みんなが幸福」になる社会は作れない

中谷氏が本の中で言っていることは、結局のところ、新自由主義の構造改革というのは「エリートが大衆を搾取するための『ツール』でしかなかった」「自由競争のなかで上手に稼ぐことが『資本主義の正義』であり、その競争に敗れて職や財産を失うのはあくまで自己責任なのだ」「稼がない人間は負け組であり、それで飢えたとしても自業自得である」という考えだ。「新自由主義思想には、格差の拡大を正当化こそすれ、それを是正して、みんなが幸福な社会、みんなが心豊かに暮らせる社会をつくろう

という意図は皆無である」「グローバル資本主義や市場原理が本質的に個人と個人のつながりや絆を破壊し、社会的価値の破壊をもたらす『悪魔のシステム』である」。・・・「結局のところ規律によって規制されない『自由』の拡大は資本主義そのものを自壊させることになるであろう。モンスターには鎖をはめなければいけない」「その誤った改革の一翼を担った者として自戒の念をこめて本書を書いた」ということです。

志位委員長の主張に「うなずけるところが」と中谷氏

マーケット・市場原理には「規律」「規制」が必要だというのは、日本共産党の主張している資本主義経済の民主的規制論と通じるところがあります。中谷氏自身、『しんぶん赤旗』日曜版の1月25日の紙面に登場して「志位さんの言っているところを聞くとうなずけるところがある」と語っていることは、そのことを裏づけていることといえます。

品川正二さん、堤清二(辻井喬)氏といい、日本の社会がいまのやり方ではいけない、資本主義のあり方も考えなければいけないという流れが生まれてきていることに、国民のための本物の改革の方向を提唱している日本共産党としても注目をしていくことが必要だと考えさせられる注目の一冊ということではないで

しょうか。

ただ、『社会主義』ということについては、まだ、偏見があるようで、イコール・ソ連型のイメージから脱していないように思われること、財源問題について大企業の内部留保などの溜め込みをはきださせることには触れられずに、消費税の20%でそのなかの配分の仕方解決がつくというように主張をしているところなどは割り引いて読んでみることでと思います。

おりしも構造改革の中心テーマだった郵政民営化をめぐる「かんぽの宿」の不正落札などの問題も噴出しています。皆さんも一度お読みになると、考えさせられることは多いと思います。